

## 魚類の成育場としての河口・沿岸域の重要性：離島のアユを中心に

鹿児島大学水産学部 久米 元

河口および沿岸域は、水産重要種を含む多くの魚類の仔稚魚にとって重要な成育場となっている。一方で、生活排水による汚濁・富栄養化、護岸、埋め立てなどといった人間活動による影響を受けやすい水域でもある。これまで、演者は人為的な環境改変が著しく進む有明海や、希少種が多く生息し、種多様性が非常に高いと考えられる奄美大島の河川河口域および沿岸域を主なフィールドとして、魚類の生態調査を実施してきた。

研究対象種の一つであるリュウキュウアユは、日本の内水面漁業において重要なアユとは別の亜種で、野生個体群は奄美大島のみに生息している。現在では環境省により絶滅危惧 A 類に指定され、地元の方々に大切に保護されている。アユ同様、本亜種は川と海を行き来して生活する両側回遊魚であるが、仔稚魚期の海洋生活期の分散は極めて限定的であり、河口・沿岸域に大きく依存して生活していることが分かってきた。

本報告では、リュウキュウアユを中心に、魚類の仔稚魚が河口および沿岸域を成育場としてどのように利用しているのか、利用の仕方には魚種間でどのような違いがみられるのか、これまでに得られた最新の研究成果について紹介する。

### <略歴>

久米 元 (くめ げん)

1974年2月18日佐賀県生まれ。鹿児島大学水産学部准教授。農学博士。専門は魚類生態学。水産重要種を含め、様々な魚類の生活史研究を行っている。主な著作『有明海の魚類相と各種の資源生態』（共著、恒星社厚生閣、2012年）、『サメのなかま』（共著、朝倉書店、2013年）、『絶滅危惧種リュウキュウアユの生活史』（分担執筆、南方新社、2016年）、『薩南諸島の陸水の外来生物：魚類とカメ類』（共著、南方新社、2017年）。